

機関番号：32621

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520506

研究課題名（和文） 北米式TESOLを通して日本の若手研究者を育成する：可能性と課題

研究課題名（英文） Nurturing young Japanese researchers through North American model of TESOL program: Possibilities and challenges

研究代表者 坂本 光代 (SAKAMOTO MITSUYO)

上智大学・外国語学部・准教授

研究者番号：30439335

研究成果の概要（和文）：

世界で活躍するために、英語能力はもはや必須であるが、日本人大学院生はそれ以上の指導を享受しなければならない。その指導を施すべく、英語教授法を学ぶ大学院生に、学会発表の準備、学術雑誌への投稿、英語教員としての経験、研究の仕方などをメンターシップ制度(Smith & Davidson, 1992)を介して学べるようにした。本研究は3年半に渡るこのメンターシップの成果をまとめたものである。

平成19年10月から平成23年3月まで13名の院生（男8名、女5名）と教員4名が本研究に参加した。ナラティブ法(Connelly & Clandinin, 1990; 2000), やアクションリサーチ(Nunan, 1990; 1992), セルフスタディ(Loughran et al., 2004), エスノグラフィー法 (Hammersley & Atkinson, 1995) などを用いて教員並びに院生の学びを調査した。

院生は早い段階で英語教員として、また応用言語学者としての認識を高めることが出来た。また、メンター（教員）は、学生の成長過程を観察し、院生への指導への指標とした。

本研究の試みは、金銭的にも労力的にも教員・院生双方には負担が掛かるものではあったが、同時に確かな成果を生み、国際的に活躍しうる学者・教員の育成に貢献出来たとと言える。

研究成果の概要（英文）：

English is deemed important in Japanese society, but Japanese graduate students need more than language proficiency to perform on par with English-speaking students worldwide. For this reason, a mentorship program (Smith & Davidson, 1992) was introduced to provide Japanese graduate students majoring in TESOL to assist them with conference presentations, journal publishing, teaching, and most importantly with conducting research. This study documented and explored the effects such mentorship has on the development of prominent young Japanese scholars.

Thirteen Japanese students (8 males, 5 females) and four instructors have participated in the program since October 2007 to March 2011. This study used qualitative research methods such as narrative inquiry (Connelly & Clandinin, 1990; 2000), action research (Nunan, 1990; 1992), self-study (Loughran et al., 2004), and ethnographic observation (Hammersley & Atkinson, 1995) to document the instructors' and the students' learning.

The students heightened their awareness from an early stage as to understanding and appreciating what it means to be a language teacher as well as an applied linguist. Similarly, the instructors were able to follow students' process in becoming academics, giving rise to new understandings and implications for guidance. The program may be costly and demands efforts on the part of both the instructors and students (Kira & Kitano, 2008), but its effects have far-reaching and long-lasting influences on those who will be making Japan a distinct and strong research nation within international academic arena.

#### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育、大学院教育、アクションリサーチ、応用言語学、TESOL

#### 1. 研究開始当初の背景

平成18年度より、上智大学大学院外国語研究科では従来の応用言語学プログラムの他、北米式英語教授法 (TESOL、Teachers of English to Students of Other Languages) ; 他言語話者に対する英語教授法) プログラムが大学院前期課程より始まった。全て英語で授業を行う大学院におけるTESOLプログラムは日本では他に例を見ない。国際的外国語教育専門家レベルの応用言語学者を育成・輩出することに関し、教員-学生のメンターシップ、学生主体のワークショップの開催など、様々な試みを導入した。縦断的研究としてその成果を研究、発表することにより、今後の日本における英語教育一般に寄与することを目標とした。

#### 2. 研究の目的

北米での大学院教育制度を参考にしながら、大学院生の1) 国際学会への参加、2) 国際学術誌への投稿の奨励、3) ティーチング・リサーチャー (略 GTR) として学部生への指導制度の導入・充実化、4) 研究・就職に関する指導などを図ることを目的とした。この目標達成のため4名の教員 (吉田、渡部、和泉、坂本) が指導を担当した。

#### 3. 研究の方法

応用言語学者であり上智大学大学院TESOLプログラムにおいて指導に当たっている専任教員四名との合同発表や、補助員 (ティーチャー・リサーチャー) として教員の授業参観などにおいて、メンタリング (mentoring, Smith & Davidson, 1992) を通じて大学院生の学者・研究者としての成長を調査した。

研究者が、被験者を観察し、データ分析を行い、まとめる研究が従来の形式であるが、この研究では、ナラティブ法 (narrative inquiry, Connelly & Clandinin, 1990) やアクション・リサーチ (action research (実践法), Nunan, 1990; 1992; 佐野他, 1998-1999)、アンケートを用いた調査研究などを導入し、被験者自身が積極的に研究に参加出来るセルフスタディ法 (Self-study, Loughran et al., 2004) も用いて、教員のみならず、院生も含む多数の参加者による多面的なデータ収集を行った。

データとしては、教員による定期的なエスノグラフィー的観察 (ethnographic observation, Geertz, 1973; Hammersley & Atkinson, 1995) や、TESOLプログラム在籍大学院生とのインタビュー、アンケート調査などを実施し、分析・まとめた。なお、データの分析法とし

では、インタビュー内容などの質的データは、テープをトランスクリイパーで起こし、NVivo7(QSR International, 2006)を用いてテーマ別に分析した。研究論文はAsia Conference on Education 2010で発表した。なお、この発表論文はJournal on Higher Educationに投稿予定で、現在原稿を推敲中である。

#### 4. 研究成果

##### (1) 平成19年度

後期より GTR 助成プログラム開始(和泉はサバティカル(研究休暇)にて直接関与していない)。

①吉田が、GTR と ASTE (Association of Sophia Teachers of English)にて共同発表。共著論文を ASTE ニュースレターに掲載。

②渡部が *Sophia TESOL Forum* (本校 TESOL プログラム大学院生のワーキングペーパー集) 刊行。

##### (2) 平成20年度

①国際応用言語学学会にてシンポジウムを開催、本プロジェクト教員と大学院生で共同発表。

②坂本が GTR とデータ収集、分析、論文執筆。

③吉田が ASTE にて GTR と共同発表。共著論文を ASTE ニュースレターに掲載。

④渡部が *Sophia TESOL Forum* 第2巻を刊行。

⑤和泉がサバティカルより戻り、GTR と研究プロジェクトを立ち上げる。

##### (3) 平成21年度

①坂本が前年度執筆した論文が大学の学部紀要に掲載される。新研究プロジェクトを立ち上げ、データ収集、分析を GTR と行い、単著で論文執筆、国際学会 (EUROCALL) にて発表。GTR も参加。

②吉田が ASTE にて GTR と共同発表、ASTE ニュースレターに共著論文掲載。また、GTR と共同でしたデータ分析結果に基づき、他6本の論文が発表された。

③GTR との共同作業で進めてきた図書の翻訳が完成し、出版された。また、*Sophia TESOL Forum* 第3巻も刊行された。

④和泉が TESOL プログラムの検証をすべく、GTR と独自でアンケートを開発、実施、分析し、学会発表などに勤しんだ。

##### (4) 平成22年度

①坂本はここ4年間のうちに集めた本研究

データについて総括した論文を執筆・発表すべく、文献検索に始まりデータ分析、執筆、学会発表と一連の作業を院生と一緒に行った。

②吉田は院生と英語教員の研修体制について研究をし、その結果を上智大学英語教員研究会 (ASTE) の例会で共同発表した。また、その結果をASTEのニュースレターに論文として発表した。

③渡部は研究補助学生に言語分析ソフトウェアの使用について指導し、大学院生向けのワークショップを運営させた。また英語教育に関する論文集出版に向けてガイドラインを整え、配布し、投稿を募集した。2011年2月17日現在3月中旬の出版に向けて準備中である。本論文集は本年を持って第4巻となる。

④和泉も前年に引き続き院生との相談の上で学習者ビリーフについて研究を継続して行ない、質問紙を用いたデータ収集と分析を行なった。データ収集は上智大学外国語学部英語学科で学ぶ1年生から3年生までの学生を対象とし、帰国子女、留学経験者、非留学経験者の3種類を含む学生を対象とした。データ収集から分析、解釈に至るまでの研究過程を院生と共に行なう中で、院生にとって応用言語学研究のノウハウを学ぶ充実したトレーニングとなったようである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 18 件)

1. 吉田研作 (2011). 「国際社会に生きるための日本人の英語」『英語教育3』. 59/ 13, p. 40. (査読無し)
2. 坂本光代 & 本多洋平 (2010). Homepage Making and Interaction: Effects of Technology-driven Collaborative Task on Social Interaction and L2 Writing ホームページ作成とインターアクション:テクノロジーを介した共同活動がもたらすインターアクションとL2ライティングについて. 上智大学外国語学部紀要. 44, pp. 71-100. (査読無し)
3. Sakamoto, M. & Tamanyu, L. (2010). Mentoring Young Japanese TESOL Researchers. The Second Asian Conference on Education 2010 Proceedings, pp. 775-794. (査読無し)

4. 吉田研作 (2010). 「日本の英語教育政策の理念と課題—一貫した英語教育体制の構築を目指して」田尻、大津(編)「言語政策を問う！」東京：ひつじ書房, pp. 179-198. (査読無し)
  5. 吉田研作 (2010). 「小学校外国語活動と評価法の進め方」『小学校・中学校「新指導要録」解説と記入、教育開発研究所編』pp. 52-56. (査読無し)
  6. 吉田研作 (2010). 「外国語教育の改善充実」『中等教育資料2月号.』885, pp. 12-15. (査読無し)
  7. 吉田研作 & 堤眞幸 (2010). SELHi 等英語教育先進校が目指してきた高校英語教育の改善. ASTE Newsletter. 58, pp. 14-26. (査読無し)
  8. 吉田研作 (2010). 「外国語、外国語活動(1)小学校「外国語活動」における指導のポイント. 新しい教育課程における言語活動の充実」『学校図書』116-119. (査読無し)
  9. 渡部良典 (2010). 「学習評価」『英語教育増刊号』pp. 14 – 15, pp. 50 – 51. (査読無し)
  10. 和泉伸一 (2010). 「思考力・判断力・表現力を育成する英語授業に向けて」『中等教育資料』No.892, pp. 32-35. (査読無し)
  11. Sakamoto, M. & Honda, Y. (2009). Homepage Making and Interaction: Effects of Technology-Driven Collaborative Tasks on Social Interaction and L2 Writing. Proceedings of the International Wireless Ready Symposium, Vol. 3, pp. 16-19. (査読有り)
  12. Yoshida, K. & Fujii, S. (2009). What CAN-DO criteria do the study guidelines require? ASTE Newsletter, Vol. 57, pp. 23-36. (査読無し)
  13. 吉田研作 (2009). 「高等学校・特別支援学校学習指導要領改訂のポイント—外国語教育の充実」『教職研修.』37/ 8, pp. 52-53. (査読無し)
  14. 吉田研作 (2009). 「生徒も教師もコミュニケーション体験」『現代教育科学』632, pp. 49-52. (査読無し)
  15. 吉田研作 (2009). 「条件整備がより良い英語活動を支える」『悠プラス.』27/2, pp. 32-33. (査読無し)
  16. 吉田研作 (2009). The new course of study and the possibilities for change in Japan's English education. 『言語・文化・教育の融合を目指して—国際的・学際的研究の視座から』開拓社、生井健一、深田嘉昭[他]. pp. 387-400. (査読無し)
  17. 渡部良典 (2009). 「学校のテストは何のために行うのか」『英語教育』Vol. 10, pp. 10-12. (査読無し)
  18. 渡部良典 (2009). 「大学入試センター試験の変更と社会的影響について—よりよい教育効果をもたらすために」『大学入試フォーラム』42, pp. 39-45. (査読無し)
- [学会発表] (計 21 件)
1. 吉田研作 & 宮崎秀太 (2011年1月22日). 英語教育の目標の変化と教育現場の対応(招待講演)上智大学英语教員研究会第168回例会. 東京
  2. 吉田研作 (2010年12月18日). 日本の英語教育の課題とその解決に向けて--金魚鉢を出て大海に出るには(招待講演). 第8回東京国際大学英语教育改革フォーラム. 埼玉
  3. 吉田研作 (2010年12月5日). 発問から広がる授業(招待講演). 上智大学・ARCLE 応用言語学シンポジウム. 東京
  4. Sakamoto, M., & Tamanyu, L. (Dec. 3, 2010). Mentoring Young Japanese TESOL Researchers. The Second Asian Conference on Education 2010 (ACE 2010). Osaka, Japan.
  5. 吉田研作 (2010年12月2日). 小学校英語活動—小中連携をどう考える(招待講演). 長崎県立大学特別講義. 長崎.
  6. Yoshida, K. (Nov. 8, 2010). Team Teaching: Individual and Joint Roles of ALTs and JTEs. 神奈川県平成22年度JET-ALT中間期研修講座. 藤沢
  7. Yoshida, K. (Oct. 17, 2010). The New Course of Study and its implications for the improvement of English education in Japan (invited speaker). JALT Kobe October Meeting, Kobe, Japan.

8. Yoshida, K. (Aug. 8, 2010). Issues in the transition of English education from primary schools to secondary schools (plenary). The 8th Asia TEFL International Conference - Teaching English as a Global Language: Creating and Sharing the Asian Framework of Practice. Hanoi, Vietnam.
  9. 吉田研作 (2010年6月27日). 学習指導要領とこれからの英語教育(招待講演)桜花学園大学学芸学部英語学科講演会. 名古屋
  10. Izumi, S. & Sasayama, S. (June 26, 2010). Task-based language teaching: What, why, and how (invited speakers). 上智大学英語教員研究会. 東京
  11. 吉田研作 (2010年3月20日). 英語教育のグランドデザインを考える(招待講演)第3回英語教育を考えるフォーラムin Okinawa. 那覇
  12. 和泉伸一 (2010年2月21日). EFL Education in Japan from the Perspective of Second Language Acquisition Research 第二言語習得研究から見た日本の英語教育の現状(招待講演). JALT—Yokohama Chapter Conference on Task-based Language Teaching. Yokohama, Japan.
  13. Yoshida, K. (Oct. 18, 2009). English as an International Language and International Communication (plenary). 2nd Annual Intercultural Conference. Tokyo, Japan.
  14. Yoshida, K. (Oct. 11, 2009). MEXT's Attempt to Create a Coherent English Educational Program from Elementary School to University (invited speaker). JALT-Gunma Chapter. Maebashi, Gunma.
  15. 吉田研作 (2009年9月25日). 大学の英語教育に求められるもの(基調講演)大学関西フォーラム第14回懇話会—英語力をどう育てるか. 大阪
  16. Sakamoto, M. (Sept. 10, 2009). Using Online Social Networking System (SNS) to promote L2 writing: Exploring possibilities in Japan. EUROCALL 2009, Gandia, Spain.
  17. Watanabe, Y. (Aug. 7, 2009). Taming the external force - A case of high-stakes testing and the role of assessment in enhancing the quality of life in EFL classrooms (Invited speaker). The 2009 Asia TEFL International Conference. Bangkok, Thailand.
  18. 渡部良典 (2009年7月18日). テスト、教育、イノベーション—なぜテストで教育を変えようとする試みは失敗するのか(招待講演). JACET関東支部月例研究会. 東京
  19. Yoshida, K. (June 28, 2009). MEXT's new path to learning and its impact on English education (plenary). Nakasendo 2009: Paths to Learning. Tokyo, Japan.
  20. Yoshida, K. (May 30, 2009). New directions for English education in Japan—implications from MEXT's new course of study (plenary). First Annual N.E.A.R. Language Education Conference. Niigata, Japan.
  21. Sakamoto, M., Yoshida, K., Watanabe, Y., Izumi, S., Hanaoka, O., & Maruyama, Y. (Aug. 25, 2008). Symposium: TEFL in Japan: Where it's at, where it's headed. AILA 2008, the 15th World Congress of Applied Linguistics. Essen, Germany.
- 〔図書〕(計5件)
1. 吉田研作監修 (2010). ベーシック プログレッシブ英和・和英辞典. 東京: 小学館、953 ページ
  2. Watanabe, Y. (2010). Taming the External Force of High-stakes Language Testing - Identifying Conditions under Which Tests Work for Improving EFL Practices. In Moon, Y. & Spolsky, B. (Eds.), Language Assessment in Asia: Local, Regional or Global? , pp. 27 – 52. Seoul Korea: ASIA TEFL.
  3. 渡部良典(2010). 言語テストの作成と評価. 東京: 春風社. 274 ページ
  4. Watanabe, Y.(ed.)(2010). SOPHIA TESOL FORUM: Working Papers in TESOL, Vol. 3. 上智大学外国語研究科. 166 ページ
  5. Watanabe, Y. (ed.)(2009). SOPHIA TESOL FORUM: Working Papers in TESOL, Vol. 2. 自費出版. 126 ページ

〔その他〕(計 2 件)

1. 和泉伸一 (2009年11月17日). Focus on form in English language teaching in Japan 日本の英語教育でのフォーカス・オン・フォームの役割(招待講演). 東京私立中学高等学校協会. アルカディア市ヶ谷(私学会館)
2. 和泉伸一 (2009年8月8日). Different Ways of Looking at SLA and their Impact on Language Teaching 第二言語習得に対する異なる見方とその教育に対する影響(招待講演). 語学教育研究所. 東京

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

坂本 光代 (SAKAMOTO MITSUYO)  
上智大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：30439335

### (2) 研究分担者

吉田 研作 (YOSHIDA KENSAKU)  
上智大学・外国語学部・教授  
研究者番号：80053718

渡部 良典 (WATANABE YOSHINORI)  
上智大学・外国語学部・教授  
研究者番号：20167183

和泉 伸一 (IZUMI SHINICHI)  
上智大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：10327877

### (3) 連携研究者

・無し